

花咲かじじい

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがあ
りました。

正直しょうじきな、人のいいおじいさんとおばあさんどうでしたけ
れど、子どもがないので、飼かいいぬ犬いぬの白しろを、ほんとうの子どものよ
うにかわいがっていました。白も、おじいさんとおばあさんに、
それはよくなつていました。

すると、おとなりにも、おじいさんとおばあさんがありました。
このほうは、いけない、欲よくばりのおじいさんとおばあさんでした。

ですから、おとなりの白をにくらしがって、きたならしがって、いつもいじのわるいことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわをかついで、畑をほりかえしていますと、白も一いっしょ緒についてきて、そこらをくんくんかぎまわっていました。ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの、大きなえのきの木の下までつれて行って、前足で土をかき立てながら、

「ここほれ、ワン、ワン。

ここほれ、ワン、ワン」

となきました。

「なんだな、なんだな」

と、おじいさんはいいながら、くわを入れてみますと、かちりと音がして、穴のそこできらきら光るものがありました。ずんずんほって行くと、小判こばんがたくさん、出てきました。おじいさんはびつくりして、大きな声でおばあさんをよびたてて、えんやら、えんやら、小判をうちのなかへはこび込みました。

正しやうじき直なおじいさんとおばあさんは、きゆうにお金持ちになりました。

すると、おとなりの欲よくばりおじいさんが、それをきいてたいへんうらやましがって、さつそく白しろをかりにきました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白をかしてやりますと、欲よくばりおじいさんは、いやがる白の首くびになわをつけて、ぐんぐん、畑のほうへひっぱって行きました。

「おれの畑にも小判がうまっているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」

といいながら、よけいつよくひっぱりますと、白は苦しがつて、やたらに、そこらの土をひっかきました。欲よくばりおじいさんは、
「うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」

といいながら、ほりはじめましたが、ほっても、ほっても出てく

るものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらにほって行きますと、ぷんとくさいにおいがして、きたないものが、うじやうじや、出てきました。欲ばりおじいさんは、「くさい」とさげんで、鼻をおさえました。そうして、腹立ちまぎれに、いきなりくわをふり上げて、白のあたまから打ちおろしますと、かわいそうに、白はひと声、「きやん」とないたなり、死んでしまいました。

しょうじき

正直 おじいさんとおばあさんは、あとでどんなにかなしがつたでしよう。けれども死んでしまったものはしかたがありませんから、涙をこぼしながら、白の死骸を引きとって、お庭のすみに穴をほって、ていねいにならずめてやって、お墓の代りにちいさ

いまつの木を一本、その上にうえました。するとそのまつが、みるみるそだつて行つて、やがてりっぱな大木たいぼくになりました。

「これは白の形見かたみだ」

こうおじいさんはいつて、そのまつを切つて、うすをこしらえました。そうして、

「白しろはおもちがすきだったから」

といつて、うすのなかにお米を入れて、おばあさんとふたりで、「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめますと、ふしぎなことには、いくらついてもついても、あとからあとから、お米がふえて、みるみるうすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、だいどころ台所 いっぱいお米になつ

てしまいました。

三

するとこんども、おとなりの欲よくばりおじいさんとおばあさんがそれを知ってうらやましがって、またずうずうしくうすをかりにきました。人のいいおじいさんとおばあさんは、こんどもうっかりうすをかしてやりました。

うすをかりるとさつそく、欲よくばりおじいさんは、うすのなかにお米を入れて、おばあさんをあいてに、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめましたが、どうしてお米がわき出すどころか、こ
んどもぷんといやなにおいがして、なかからうじやうじや、きた
ないものが出てきて、うすにあふれて、そとにこぼれ出して、や
がて、だいどころ台所 いったい、きたないものだらけになりました。

よく欲ばりおじいさんは、またかんしゃくをおこして、うすをたた
きこわして、まき薪にしてもしてしまいました。

しようじき正直 おじいさんは、うすを返してもらいに行きますと、灰
になっていましたから、びっくりしました。でも、もしてしまつ
たものはしかたがありませんから、がっかりしながら、ぎるのな
かに、のこった灰をかきあつめて、しおしおうちへ帰りました。

「おばあさん、白しろのまつの木が、灰になってしまったよ」

こういつておじいさんは、お庭のすみの白のお墓はかのところまで、灰をかかえて行ってまきますと、どこからか、すうすうあたたかい風が吹いてきて、ぱつと、灰をお庭いっぱいに吹きちらしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のまま立っていたうめの木や、さくらの木が、灰をかぶると、みるみるそれが花になって、よそはまだ冬のさなかなのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春げしきになってしまいました。

おじいさんは、手をたたいてよろこびました。

「これはおもしろい。ついでに、いつそ、ほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」

そこで、おじいさんは、ざるにのこった灰をかかえて、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、おうらい往來をよんであるきました。

すると、むこうからとの殿さまが、馬にのつて、おおぜいけらい家來をつれて、かり狩から帰つてきました。

殿さまは、おじいさんをよんで、

「ほう、めずらしいじじいだ。ではそのさくらの枯れ木に、花を咲かせて見せよ」

といいつけました。おじいさんは、さつそくざるをかかえて、さくらの木に上がって、

「金のさくら、さらさら。」

銀のさくら、さらさら」

といいながら、灰をつかんでふりまきますと、みるみる花が咲き出して、やがていちめん、さくらの花ざかりになりました。殿さまはびっくりして、

「これはみごとだ。これはふしぎだ」

といって、おじいさんをほめて、たくさんにごほうびをくださいました。

するとまた、おとなりの欲よくばりおじいさんが、それをきいて、

うらやましがって、のこっている灰をかきあつめてざるに入れて、

しょうじき
正直 おじいさんのまねをして、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、おうらい往來をどなつてあるきました。

するとこんども、との殿さまがとおりがかつて、

「こないだの花咲かじじいがきたな。また花を咲かせて見せよ」

といいました。よく欲ばりおじいさんは、とくいらしい顔をしながら、灰を入れたざるをかかえて、さくらの木に上がつて、おなじように、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

ととなえながら、やたらに灰をふりまきました。いつこうに花

は咲きません。するうち、どつとひどい風が吹いてきて、灰は遠えんりよ慮なしに四方八方へ、ばらばら、ばらばらちつて、殿さまやご家来けらいの目や鼻はなのなかへはいました。そこでもここでも、目をこするやら、くしゃみをするやら、あたまの毛をはらうやら、たいへんなさわぎになりました。殿さまはたいそうお腹はら立ちになつて、

「にせものの花咲かじじいにちがいない。ふとどきなやつだ」といって、欲ばりおじいさんを、しばらくしてしまいました。おじいさんは、「ごめんなさい。ごめんなさい」といいましたが、とうとうろう屋やへつれて行かれました。

青空文庫情報

底本：「むかしむかしあるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年12月19日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花咲かじじい

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>